



日本キリスト教団
三軒茶屋教会
http://sanchurch.jp/

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: 03-3418-4933
発行: 三軒茶屋教会 広報部

折れなくなってしまう。気づいたら、折っていない自分となつていく。誰でもそうない得る。

祈りは、キリスト者でなくとも、個人であれ群れであれ、人間だけがなしうる営みだ。人類の一員であることしるしでもある。

しかし、時に祈りをやめてしまうことがある。何を祈ったらよいかわからなくなった。いくら祈っても何も変わらなうか。折つてもただむなしさを感じるだけ。祈る気力もなくなつた。そうなつてしまふ

心境は誰にでも忍び寄ってくる。では、祈るのを止めたら、何か解決するだろうか。気分爽快になるだろうか。懸念や不安は消えていくだろうか。

聖書における「祈り」は、個人的な嘆願や請願だけではない。旧約聖書の詩編には、様々な祈りが語られている。

詩編は、感謝、賛美、誰かのための執り成し、信頼、喜び、驚嘆、呪い、祭り、葬り、為政者のため、病死、絶望、不安など、およそ人間が抱き得る感情を幅広くうたいあげている。

敵や悪人に対する激しい憤慨や非難ですら、呪いとして、神に向かつてささげようとする。祈りの言葉となつて言葉ともなる。つまり、祈りには、どのような内容であつても、必然的に人間の本性が必然的に現れる。いや、今の自分の率直な気持ちや心のありさまを、堂々と躊躇なく現してよい領域が、祈りなのだ。

この領域を認めて祈ろうとするか、それとも拒絶するか。それによつて、その人のありさまは大きな差異が出るだろう。

その差とは「時を受容する感覚の差」となる。祈りは、常にその人の過去の日々が積み重なつた「今」に現れるからだ。

あの出来事、あの人、あの状況があつたからこそ「この今」がある。それをどのように受け止めるのか。それがどうなつてほしいのか。

祈りは、過去をどう受け止めていて、将来において自分がどう振る舞いたいのかを、今言葉にして確かめ

折れないとき

牧師 伊藤英志

る営みとなつていく。

したがって、折れないとは、過去を受け止められない今の自分に戸惑つていて、これからどうしたらいいのか迷っているさまが現れ出ている時となる。それはどの時代にもあつた人間の避けられない本性でもあるのだ。

「時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。」(エフエソ5・16)

何かが悪い、誰かが悪い。だからこそ折れない。祈りたくない。そのような時にこそ、折つていっている人々の中に向かつて行く勇氣を請いたい。



群れに向かつて行く勇氣を請いたい。どのよう

な現実が今あるとしても、時は進んでいる。

僅かであつても何か確実に変化している。折れない人も折れる人々の中に居てよい。それが、誰かの祈りが受け入れられ、その祈りが実現しているしとなつていく。

主イエスが地上で折つておられたように、神の子とされた者たちは、折つてよい。どのような事柄であつても、絶えず祈り続けられる願いを探し求めてよいのだ。

たどつた祈りによつて、人は自分を取り戻し、再び立ち上がるのだ。